うさぎ屋敷

作・岩崎京子
画・朝倉　摂

うさぎ屋敷

岩崎京子

NDC 913
岩崎京子（いわさききょうこ）
うさぎ屋敷
ポプラ社　1974年
240p　21cm　（創作ブックス６）
8093-016006-7764

著者との話し合いにより検印廃止

創作ブックス⑥
うさぎ屋敷

著者　岩崎京子
発行　昭和49年6月　印刷
　　昭和49年6月　発行©
発行者　久保田忠夫
発行所　株式会社　ポプラ社
東京都新宿区須賀町5
TEL(357)2211(代)

印刷　新興印刷製本株式会社
製本　富士製本株式会社

落丁本・乱丁本はいつでもおとりかえします
定価は箱の裏に表示してあります

もくじ

一、ひな 6
二、あばれんぼう 18
三、萩のつゆ 29
四、蔵屋敷 42
五、むくうさぎ 56
六、亥年の火事 66
七、黒頭巾 77
八、新徴組 89
九、柳原土手 98
一〇、江戸の最後 108

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

一一、東征軍 119
一二、藩邸お召し上げ 129
一三、彰義隊つぶし 140
一四、うさぎ屋嘉平 154
一五、フランス渡りのうさぎ 166
一六、うさぎ騒動 178
一七、秋の夜 187
一八、三毛のうさぎ 198
一九、太政官布告 209
二〇、春の雪 219

筆者の紹介

岩崎京子（いわさき　きょうこ）
一九二二年、東京に生まれる。恵泉女学園高等部卒業後、友人らと「童話の会」を作り、児童文学創作を手がけてきた。主な作品に、「シラサギ物語」「鯉のいる村」「山のウグイス」「小さなハチかい」「花咲か」等がある。
住所　世田谷区北烏山一―四〇―六

朝倉　摂（あさくら　せつ）
伊東深水氏に師事し、日本画家となる。絵本賞受賞（講談社、一九七二年）をはじめ、かずかずの賞をうける。演劇舞台美術、衣装デザイン、グラフィックデザイン、絵本、新聞・雑誌のさし絵などに幅広く活躍されている。
住所　渋谷区元代々木四二―二

＊印のことばは、巻末の説明を参考にしてください。

うさぎ屋敷

岩崎京子

一、ひな

申（万延元年＝一八六〇）の三月三日は江戸でも珍しい大雪でございました。

ほんとうならひなの日でございますから、お白酒か豆いりでもいただいているはずでございますのに……。その年は、ひなかざりもございませんでした。

四、五日前のこと、

「おあねえ様、うちのおひな様がないの。」

と、妹のたえが申しました。おひな様がかざりたくなり、ふみ台にのぼって、違い棚の上の天袋をあけましたところ、表書のついた桐の箱が見あたらなかったそうでございました。

いつもでしたら、節季節季の行事が好きで早々と自分で飾りつけてくれます父が、その年は何も申しませぬものですから、おかしいとはぞんじておりました。

「ようく探したの、たえさん。」

「ええ。」

「おや、なんですか。あなたは武家の娘でしょう。涙など出すものではありません。」

「でも……」

「わかっております。」

そのおひな様は殿様、藤堂和泉守（十一代高猷）様から、父が拝領したものでございました。紫のちりめんの幕をまん中でしぼった高御座があって、その中に一対の内裏様がすわっている、それだけのものでございましたが、お国表の津の町の、名ある人形師が作りましたものとか。紫の金襴の衣冠束帯、緋の金襴の十二単衣の内裏様はろうたけたおもざしで、ほんのり白く、私どもは年に一度、このおひな様に会うのがどんなに楽しみでございましたことか……。

殿様は洵尭斉と申される雅名をお持ちで、和歌、俳諧に御堪能でいらっしゃいます。そのほかにもお謡、お仕舞、将棋など多方面に御趣味がおありでございました。

お国の津のお城においであそばす時には、しばしばお催しがあり、家中の者とか、町方までお招きがございますそうで。その御趣向は江戸に出てこられた方々からよくうかがったものでございました。

参勤交代と申しまして、殿様が江戸においであそばすのは、二年に一度、百日間でございますが、お忙しい政務や、*お公儀に伺候あそばす合間にも、よく歌合わせだとかお能の会がございました。

それが桜のころとか、紅葉のころでございますと、染井の*下屋敷の広い庭にかがり火をたきまして、盛大なことでございました。その折りには私ども女、子どもまでお招きいただくのでございました。

殿様や奥方様のお姿など、ふだん一度も拝することはございませんが、かがり火の向こうに遠く小さく、御重役方やら侍女たちにかこまれていらっしゃる白いお顔を拝したのでございました。

「あのお方が若殿だ。そのおとなりがその御室（奥方）、量姫様、そのお膝にまつわりついておられるのが璋雄君だ。殿さんにとっては孫君さね。」

御次男の錬五郎君、お末の敬姫様……と、父が教えてくれますので、私はせいぜいのびあがって拝したものでございました。

また殿様は町人の風におつくりになり、江戸の町をおしのびでお歩きになることもございました。江戸においであそばす間は、日ごろの御勤厳もほぐれあそばすのでございましょうか。

「二本ざしはやぼでいかぬ。」

などと、一刀だけ落としざしになられたり、時には無刀でお出かけになりますもので、*御用人の七里勘十郎様は苦い顔をなさいます。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「そう、おくだけあそばしては……。酔狂がすぎると申しますもの。殿、万一のことが出来の折りはいかがなされまする。お公儀からもきつうおとがめがござりまするぞ。*御家老にも、奥方様からもそれがしがきつうお叱りをたまわります。」

「わかった、わかった。もうよい、勘十郎、そう、泣き声を出すな。」

さすがの殿様も忠義一徹の用人は苦手のごようすで、「勘十郎がうるさい、かくもうてくれ」と、むさくるしい私どもの長屋にかけこまれたこともございました。

父は江戸屋敷小納戸衣服方、五十石取り、加藤田真一郎と申します。江戸定住の定府者でございました。父のわざと使います江戸ことばが、殿様には国もとからの勤番の方々よりあかぬけて見えるのでしょうか。おしのびのお供を仕ったことがありました。そんなこと、後にも先にもただ一度だけでしたが……。

じつはおひな様はその折り、拝領したものでございました。

私にはおひな様の行方がおぼろげに察せられました。たとえば、黒いうるしに蒔絵の桜を散らした十客のお椀も、梨地の足付膳なども、目ぼしい道具はいつの間にか天袋や納戸から消えておりました。毎日いただくお米の代にかわったものと思われます。

おひな様も同じさだめ。でも、殿様大事、お家第一を旨としている父が拝領ものをあれこれするはずがないような気もいたします。私は天井裏をのぞいたり、納戸の長持ちのふ

たをあけたりしたのでございました。おひな様どころか、長持ちにぎっしりつまり、日にほした後はふたもできないほどであった夜具までが一枚もありませんでした。

両親は子ども以上に無念だったろうと、今になって察しがつきますが、幼いたえがふとんの衿をかんで、しのび泣きしているのを見ますと、私まで胸のふさがるような思いがしてくるのでございました。

「たえさん、寒いでしょう。そこをしめて。」

たえは障子を細目にあけて、外の雪をのぞいておりました。時々鶴の羽のような雪片が舞いこむので、文句を申しましたが、たえはふりむきもしません。*稚児輪の頭を心もちかしげて、さびしそうでございました。やはりおひな様のことが心残りなのでございましょう。なんと申しましても、たえはまだ七歳、まだまだおひな様のいる年ごろでございます。

私は立っていって、たえの肩に手をおきました。するとまあ、たえはしずかに肩をゆすりあげて泣いていたのでございます。私は気づかぬふりをして、外をのぞきました。

「まあ、白一色、まぶしいくらいですこと。雪って何もかも包みこんで、いつも見なれた所がまるでよその国のようですわね。」

私どもの住まいは、向う柳原、藤堂家江戸屋敷の長屋の一軒でございました。北側の塀

に沿って、同じ窓、同じ出入口、同じ構えで並んでおりました。長屋は今ひとつ、西の塀際にもございました。そちらは殿様のお供で単身江戸入りした勤番者の住まいになっておりました。

正面にはお屋敷の椎の大木が墨絵のようにけぶって見えるだけでございました。その向こうに広がるお屋敷の敷地は広大なもので、大門のうちには細かい砂利がしきつめられ、それがいつも白く洗われていて、足の下でさっさっと松を渡る風のように鳴るのでございました。

垣でくぎったお庭には、私どもははいることは許されませんが、いくつも橋のかかった大きな池とか、あちらに曲がり、こちらに曲がりしている流れや滝などもございました。枝ぶりのみごとな松も、庭石も、燈籠も雪がつもって、さぞかし風情をそえていることでしょう。

でも、私たちには春の雪景色を賞している心のゆとりなどございません。ひなかざりもないひなの日の雪に、さびしさだけがつのるのでございました。

たえが指に息をふきかけていました。赤くはれたつめたそうな指に……。たえの指は毎年秋口からしもやけでふくれだし、いくらかいすうりのお湯につけても、一冬なおりませんでした。私はそっと障子をしめ、たえの肩をおして、火鉢の方へつれていきました。

「父上はもうお城へおつきかしら。」

私はたえの気持ちをそらすため、ほかのことを申しました。

ちょうどその日は、殿様の節句登城で、父はその仕度とお供のため、暗いうちからお屋敷へあがっておりました。

殿様は津のほかにも伊賀上野（三重県西部、上野市）一国を領しておられましたので、国持ち大名としての格も高く、それだけに、将軍様御拝謁にはものものしい仕度がございました。

お召物は長かみしもですが、これは長々とひきずるので、かごの乗り降りに不便で、袴の内側からひもでくくり、裾をたくしあげておくそうでございます。このお召しかえのお手伝いをいたしますのが、父たち小納戸衣服方の仕事でございました。

「御登城」というおふれの声が、雪の中にすこしこもってきこえたのが五つ（午前八時）で、藩士一同、江戸詰めは大体百四、五十人でございますが、玄関式台の左右に並んでお待ち申しあげます。やがてぎぎいっと大門があいて、行列は出発いたしました。御謁見は四つ（午前十時）でございました。

どのくらいたっておりましたでしょうか。通用門の辺で何やら騒ぐ声がいたしました。

はっと耳をすますと、そのまま声は雪にのまれて静かになりました。私どもは顔を見あわせました。江戸はこのところ騒がしいことがつづいていたからでございました。

何でも、*黒船来からこっち、

「夷狄を征伐する、軍用金を拝借したい。」

と、四人五人、党をくむ浪士が、浅草の*蔵宿や深川木場の材木商など、もの持ちに押しいって、おどすそうでございました。

今にして思えば、*尊王攘夷の方々はこれしか運動の資金を得る道はなかったのでしょうが、そのころ江戸の者たちはただただ、けしからぬ者よ、おそろしい所業よとぞんじていたのでございました。

辻斬りが柳原の土手に出るとかで、夜分は私どもも外に出たことはございませんでした。

市内の方々に屯所ができ、見巡りが巡邏をいたしますが、押込み、辻斬りは中々やみませぬ。ひる日中から、また浪士の詮議か、盗賊の大捕物か……、この大雪の中を……と私どもは身をかたくしておりました。

その日、父は夜にはいってもどってまいりますと、いくらかたかぶった口ぶりで申しました。

「松平の屋敷の前で、*掃部様（井伊大老）のかごがおそわれた。見た者の話によると、彦根屋敷の門をくり出した五十人近い供揃いの行列が、桜田門にかかるかかからぬか……、待ちかまえておった壮士どもが十数人、斬りこんだそうじゃ。かご脇の侍と二、三合の後で、かごの外から掃部様をさし通し、雪の上にひきずり出して狼藉に及んだとか。白はちまきにまんじゅう笠、赤がっぱのそろいであったと申すから、かねて談合してあったんだろうという話じゃ。」

「おそろしいこと。」

「まったくよのう。折りからの雪に壮士どもは吉良の討ちいり気どりでひきあげていったというが、掃部様の家来に追いつめられて、自刃した者、堀にとびこんで逃げた者……。大方はつかまったらしいが……。辻々はいまだにきびしい詮議と申すから、逃げのびてる者もあるのじゃなかろうかな。」

「もしや……」

私は思わず母の袖をぎゅっとにぎりしめました。

「そうですよ、はるさん。お長屋の木戸の辺の物音は……。あるいはその時逃げていらした壮士の……」

「御城内は用部屋もたまりも上へ下への騒ぎであった。こんな事態ははじめてだからな。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com